

キム ギュンテ・カン ヒョンテ. 『ウズベキスタン・コリョ・サラムの移住と生活』ソウル：グルヌリム，2015年，284 p. (김근태, 강현모. 『우즈베키스탄 고려인의 이주와 삶』서울：글누림，2015，284 p.)

李 眞恵*

「コリョ・サラム (고려사람 Корё сарам)」とは、旧ソ連地域に住んでいるコリアン・ディアスポラである。本書はタイトルにあるとおり、旧ソ連中央アジアの一国であるウズベキスタンで暮らすコリョ・サラムの移住と生活について詳述した著作である。本書は、韓国の研究者らによって2009年から2013年にかけて3回にわたって実施された現地調査にもとづく研究成果であり、ウズベキスタン・コリョ・サラム自身の証言や回想を主なデータに構成されている。

2000年代初半まで、韓国内のコリョ・サラムに関する研究は、中央アジアへの強制移住を軸とする民族移動史を扱うものが主であった。その反面、旧ソ連諸国、特に中央アジア諸国の独立後の変化と、そのなかでのコリョ・サラム社会の動態を実証的に研究する試みは十分ではなかった。こうした研究の空白を埋めるべく、未だ数は少ないが、文学・人類学・社会学・地域研究の専門家が挑み続けている。2015年に出版された本書は、旧ソ連諸国のうち、1991年に独立し主権国家となった一国のコリョ・サラム社会に関するも

のである。現在まで、居住国別にコリョ・サラム社会が研究された事例は極めて少ない。¹⁾ 旧ソ連諸国の独立以降は各国の国民統合過程の形態により少数民族社会へ対応も異なっており、少数民族のひとつであるところのコリョ・サラム社会についてもまたしかりである。そのため、本書の特長のひとつは、この居住国別のアプローチを用いている点にある。

本書は全体として、ウズベキスタン・コリョ・サラムの近現代史を再構築することを試みている。構成は以下のとおりである。

- 第一章 極東から中央アジアへ
- 第二章 中央アジアへの定着
- 第三章 コリョ・サラムの通過儀礼
- 第四章 コリョ・サラムの体験談
- 第五章 コリョ・サラムの英雄
- 第六章 新しい生活基盤を求めて

以下、各章を概略する。

まず第一章と第二章では、ロシア極東から中央アジアへの強制移住と、その後コリョ・サラムが中央アジアに定着する過程について述べられている。コリョ・サラムの強制移住・初期移住に関して(第一章)は、既存研究とほぼ同じ見解が提示されているにすぎないが、定着過程の考察(第二章)には、本書

1) 2000年から2015年まで韓国での地域別コリョ・サラム研究のなかで、論文は、カザフスタン・コリョ・サラム関連が16点、ウズベキスタン・コリョ・サラムに関するものが11点、単行本は、カザフスタン・コリョ・サラム関連が4点、ウズベキスタン・コリョ・サラムに関するものが2点にすぎない(論文検索：〈<http://kiss.kstudy.com/>〉(2017年1月12日)、単行本検索：〈<http://www.yes24.com/>〉(2017年1月12日))。

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

独自の知見も示されている。たとえば、強制移住は1937年以降、まず国境地域居住者を対象として、次いで内陸居住者を対象として、計2回に分けて実施されたわけであるが、このとき都市部の住民はカザフスタンへ、農村部の住民はウズベキスタンへ移住させられている (pp. 66-70)。ここに著者たちは、カザフスタン・コリョ・サラム、およびウズベキスタン・コリョ・サラムそれぞれの歴史の端緒を見出している。本書の主張によれば、ウズベキスタン・コリョ・サラムの大部分が農村部から移住「させられた」人々である。ただ、なかには農業を続けるために、農業環境がより良いウズベキスタンへの移住を「決めた」人々もいたという。彼らはウズベキスタンに到着後、豊富な農業用水を提供するチルク川を中心に定着村を形成し、現地の人々に稲作の農法を指導した (pp. 69-96)。このように、コリョ・サラムが強制移住以降、ウズベキスタンへ定着する過程から、ウズベキスタン・コリョ・サラム独自の生活様式を築いていったことが明らかにされる。

第三章では、ウズベキスタン・コリョ・サラムが行なっている通過儀礼、すなわち出産と産褥、婚礼、祭礼について概説している。ウズベキスタン・コリョ・サラムの冠婚葬祭に関する慣習は、中央アジアで2番目にコリョ・サラム人口が多く、独立後急速に都市化が進んだカザフスタン・コリョ・サラムに比べると、農村部に集住した彼らによって比較的よく保持されている。特に、強制移住を経験したウズベキスタン・コリョ・サラムには、朝鮮語の教育を受けた極東出身者が多い

ため、現在のカザフスタン・コリョ・サラム社会に比べると、伝統的な習俗などが比較的よく保持されている。しかし、それでもやはり時間が経つにつれて変化し、簡素化され、その痕跡だけが残っている状況である、と考察されている。

第四章と第五章では、ウズベキスタン・コリョ・サラムの体験談と彼らの証言をもとに、ウズベキスタン・コリョ・サラムについての「英雄」、たとえば、キム・ピョンファ (김병화 김 펜 Хва) (1905-1974) や、パク・ギョンゾ (박경조 Пак Ген Чо) (1886-1962)、そしてホン・ボンド (홍범도 Хон Бом До) (1869-1943)、キム・アレクスサンドラ (김알렉산드라 김 Александра) (1885-1918?), アン・ジュンゴン (안중근 Ан Чун Гын) (1879-1910) について記されている。彼らは、今日もコリアン・ディアスポラの間でしばしば言及されるなじみの人物である。ただ、従来の歴史分野の研究書などにおける言及とは違い、人々の記憶に残る日常生活でのエピソードが生き生きと伝えられている点は、本書の特長である。しかし、これらの章が考察する証言やその対象は、時期的にはソ連時代にとどまっており、ウズベキスタン・コリョ・サラム固有の特徴を語ることに成功しているのかどうかは疑問が残る。ここで言及される英雄たちが活躍した時期はソ連時代であるため、新しい独立国としてウズベク化が進む状況下に暮らす現代ウズベキスタンのコリョ・サラムという観点からすると、焦点がすこしばやけているようにも感じられる。

第六章では、新生独立国の成立から始まっ

たウズベキスタン・コリョ・サラムの新しい移住について簡略な紹介が行なわれている。1991年のソ連崩壊後、旧ソ連地域の国々が主権国家になり、各国ごとに異なる国民統合過程にさらされて、ウズベキスタン・コリョ・サラムは新しい生活基盤を求めて移住している。1953年スターリンの死後にスターリン批判を展開したフルシチョフの登場で、コリョ・サラムにも、ソ連邦内での移動の自由が与えられることになった。移動を繰り返しながら、彼らは生活面では、それなりの安定を獲得してきたといえる。しかし、1991年のソ連崩壊とウズベキスタン独立以降、政治・経済の混乱とウズベキスタンの民族主義の台頭は、ウズベキスタン・コリョ・サラムの国外への移住の原因ともなった。彼らはウクライナやロシアへ基盤を移したり、また、より良い経済活動や少数民族に対する政治的な環境が厳しくないカザフスタンへの移住を選んだりしている。居住国別コリョ・サラム研究という視点からみると、本章がウズベキスタンという一国内のコリョ・サラムの一面について知ることができる最も重要な章といえるが、残念ながら本章は独立後ウズベキスタン・コリョ・サラム社会の主要な変化であるウズベキスタン・コリョ・サラムの国外移住については部分的にしか言及されておらず、ソ連崩壊以降の全般的なコリョ・サラムの移住についての概括にとどまっている。

以上が本書の概要であるが、最後に本書の位置づけと課題を改めて示しておきたい。

ソ連崩壊後の中央アジア諸国における国民統合過程は国ごとに異なり、主幹民族中心の

国民統合に対する諸民族の対応もさまざまである。冒頭にも述べたように、各国によって相違するコリョ・サラム社会の実態を捉えるためには、国ごとにコリョ・サラム社会をしぼったうえで、個別具体的に彼らの生活様式や生計戦略などを分析する必要がある。この点において、すなわちコリョ・サラムに対して居住国別のアプローチを採用し、ウズベキスタン・コリョ・サラムの歩んだ固有の歴史的展開を取り上げようとした点で、本書はコリョ・サラム研究への一定の貢献をなしている。

しかし、上述のような方向性を掲げながらも、実際にはほとんどの叙述内容がコリョ・サラムの全般的な歴史や慣習に偏っているところに、本書の限界を感じてしまう。換言すれば、本書の考察が、どこまで現在のウズベキスタンのコリョ・サラムに固有な特徴なのかが明らかではないのである。たとえば、本書で扱われている証言者の体験談の内容は、①極東での生活、②極東からウズベキスタンへの強制移住とその後の定着のプロセス、そして③集団農場（コルホーズ）での業績に関するものに分けられる。ここで扱っているようなコリョ・サラムの映像・音声資料、特に人々の証言の記録や資料は保存状態が不十分であり、現在ではそれらを経験した生存者も極めて少なくなっているため、証言者の体験談自体には価値があることを断ったうえでいうならば、証言者の多くが、ウズベキスタンが独立国になるはるか前の状況を回想しており、また証言者の背景について大部分の情報が抜け落ちているため、その証言内容が

ウズベキスタン・コリョ・サラムの現況と直接的につながるのかどうか、疑問が残ってしまうのである。証言や回想を主要なデータとする限り、証言者の社会的・歴史的背景に関する情報は、それらを判断し、文脈化するにあたって不可欠な要素である。こうした情報が大きく抜け落ちている点も、本書の学術的価値を下げていることは否めない。

コリョ・サラムにとって、移住を繰り返しながら、居住国にかかわらず維持しようとしてきた「伝統」がある反面、彼らがおかれた社会的・生態的・政治的環境との相互作用を通じて変容し、新たに築かれつつある側面もあるだろうことは、想像に難くない。「コリョ・サラムを居住国別に捉える」と一言でいっても、それがどのような手法によって可能となるのかは、引き続き考えていかなければならない、コリョ・サラム研究にとっての大きな課題のひとつである。

Ronald A. Messier and James A. Miller.
The Last Civilized Place: Sijilmasa and Its Saharan Destiny. Austin: The University of Texas Press, 2015, xiv+280 p.

平山草太*

「スィジルマーサへようこそ」という一文から始まる本書は、「黄金の都市」として知られる北アフリカ・スィジルマーサの町において、1980年代終わりから90年代にかけて

おこなわれた領域横断的調査の総括となる著作である。スィジルマーサは現在のモロッコ南東部、サハラ砂漠の縁辺にかつて存在し、この地理的条件を一因として、サハラ交易における要衝となっていたオアシス都市である。私はイブン・バットゥータのアトラス山脈越えそして西アフリカへの旅に関連して、スィジルマーサやその他モロッコ南東部の都市についての研究を調べていくうち、本書に出会った。著者のひとりである歴史学者ロナルド・メシエは、1970年代から80年代にかけて、スィジルマーサでかつて打造された古銭に関する研究を発表したのち、1987年からスィジルマーサにおける考古学を中心とした領域横断的調査プロジェクト、MAPS (*Moroccan-American Project at Sijilmasa*) の立ち上げに中心メンバーとして関わった。本書のもうひとりの著者であるジェームズ・ミラーは、MAPS立ち上げと同時期にモロッコで調査をおこなっていたつながりで、のちにMAPSに加わった地理学者である。

本書のタイトル、「最後の文明の地 (*The Last Civilized Place*)」は、11世紀のアンダルスで活動した学者であるバクリー (*Abū 'Ubayd al-Bakrī*, d. 1094?) による、「スィジルマーサは砂漠の入り口にあって、その西にも南にも人の住むところは知られていない¹⁾」という趣旨の記述を下敷きにしている。このような描写からもわかるように、スィジルマーサはサハラ砂漠の玄関口であったとさ

1) 原文は以下のとおり。 wa madīna sijilmāsa fī awwal al-ṣaḥrā' lā yu'rafu fī gharbīy-hā wa lā fī qiblīy-hā 'umrān [al-Bakrī 1992: 836].

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科